昭和 36 年度
（1961）

厳冬期前アルプス全山縦走

（唐沢岳・餓鬼岳から燕岳、常念岳を経て霞沢岳）

昭和 36（1961）年 12 月 15 日～ 1 月 8 日

松本平から見える北アルプスの前山を、端から端まで縦走した記録である。

唐沢岳・餓鬼岳はもちろん霞沢岳は、当時はまだ入山の人も少なく、ルートも自ら切り拓いていかねばならず、偵察にも時間をかけた。北燕岳あたりの岩峰のトラバースは雪崩の危険性（昭和 30 年 12 月の合宿では、文理学部山岳部が雪崩にあった報告もある）もあり、リッジどおしの通過に苦労した。また、大滝山から霞沢岳までの樹林帯のラッセルに予想以上にシゴかれた 25 日間の縦走合宿であった。記録がほとんど残っていない中で、「計画書」「縦走隊出島五郎のメモ」「蝶ケ岳サポート隊記録」「冬山合宿の反省」等が残っていたのでこれを掲載する。

今回の計画は松本・伊那両山岳部の完全な合同で行う運びとなった。春山遭難による痛手、旧部員の不足に加えて、新部員数の絶対多数、冬山に参加できぬ医学部部員、と多数の困難を抱えた松本山岳部。南信の地にあっても北アの冬に憧れる伊那山岳部。まして過去一年間同じ学び舎にあった者として、また個人的な合同山行も多々であり、この合同は自然の成り行きであったといって良い。

地理的な遠隔という困難をも辞さず、山を通して一つに結びあっていこうとする我々の努力はまさに今合宿の成果如何にかかっている。

我々の憧れと我々の実力の一致した唐沢岳より霞沢岳への前アルプス縦走案が採択されたのは 10 月。早速 11 月上旬には各問題個所へ偵察に入り、若干の問題は残しているが、ルートは確認された。

今合宿では縦走の遂行もさることながら、サポート各隊の冬山技術（広い意味での）の向上により重点を置きたい。“より高く”“より深く”を願って立案された計画であることを忘れたくない。その意味で内容のある合宿であることを願う。

部員諸君の協力と健闘を祈る。

CL　後藤　紀彦

参加メンバー

縦走隊　L 葛西正美　西郡光昭　小谷雅宣　出島五郎　川崎　誠

唐沢サポート隊　L 小林　実　小川永行　池田直弥　高橋俊博　柴田武明　田中正治

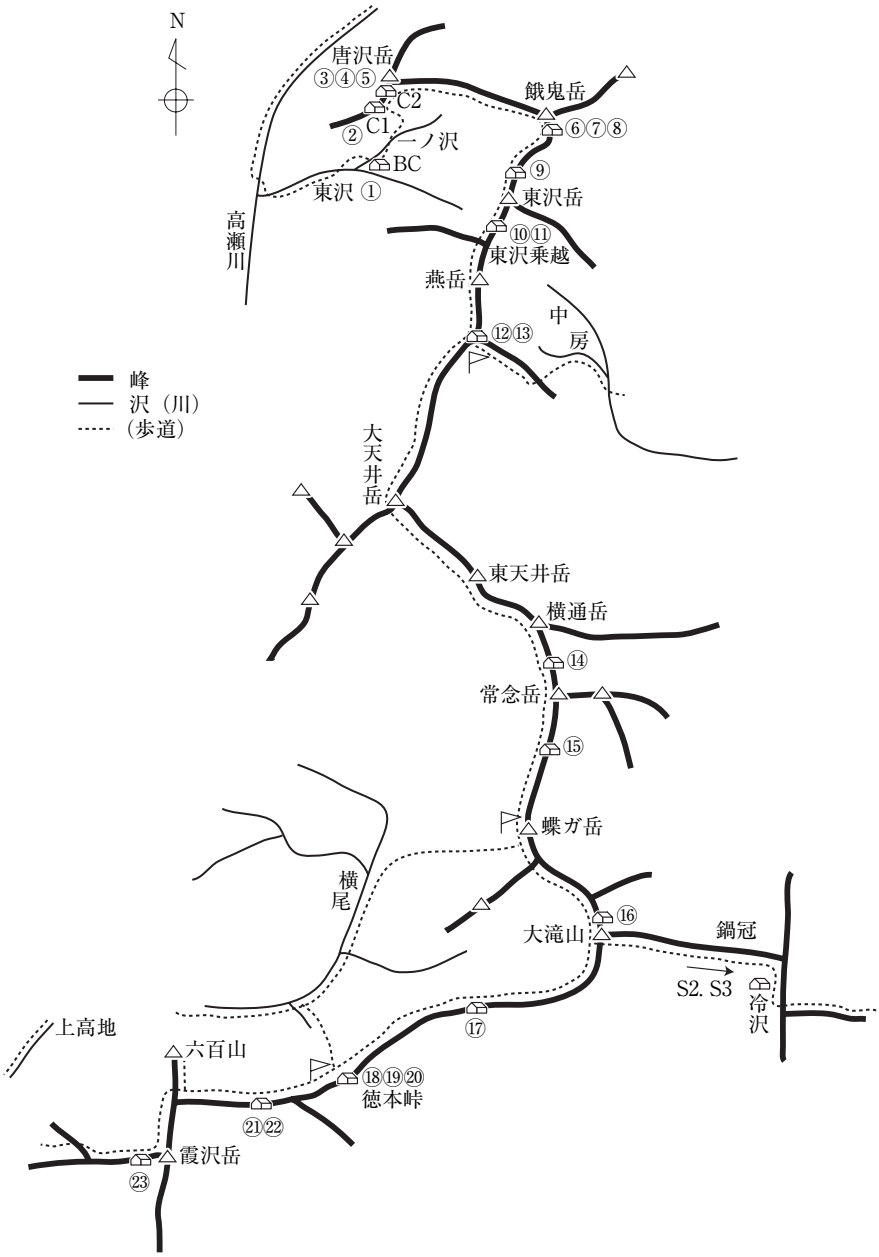
燕サポート隊　L 後藤紀彦　奥島啓志　寺田雅治　山形信之　平　邦彦　浦　正直　真野孝一

蝶サポート隊　L 主計勤也　玉井洋明　砂川祐司　松尾武久　川治晴彦　板谷真人　猿橋孝雄（OB）

行動記録

月　日	縦走隊	唐沢サポート隊	燕サポート隊	蝶サポート隊
12・15	松本～東沢 BC	同左		
16	BC ～ 2200m コル C1	同左		
17	C1 ～唐沢岳 C2	C1 ～ C2 ～ C1	松本～中房	
18	沈殿	沈殿	沈殿	
19	餓鬼岳偵察	C1 ～ C2	中房～合戦	
20	C2 ～餓鬼岳	C2 ～餓鬼岳	合戦～燕岳	
21	沈殿	沈殿	沈殿	松本～大正池
22	沈殿	沈殿	沈殿	徳本峠、横尾
23	餓鬼岳～東沢岳手前	C2 ～ C1 ～ BC	沈殿	横尾
24	東沢乗越	BC ～松本	沈殿	横尾～稜線往復
25	沈殿		沈殿	沈殿
26	燕岳		燕岳～大天井往復	横尾～稜線
27	沈殿		沈殿	沈殿
28	燕岳～常念岳		燕岳～東天井	蝶・常念のコル
29	常念岳～蝶ケ岳		東天井～蝶ケ岳	常念岳～蝶ケ岳
30	蝶ケ岳～大滝山		蝶ケ岳～大滝山	蝶ケ岳～大滝山
31	大滝山～中間地点		大滝山～鍋冠山	大滝山～鍋冠山
1・1	徳本峠		鍋冠山～松本	鍋冠山～松本
2	沈殿			
3	沈殿			
4	霞沢岳への中間			
5	沈殿			
6	六百山、霞沢岳			
7	霞沢岳～上高地			
8	上高地～松本			

●燕岳から大天井岳の稜線を行く縦走隊



前アルプス概念図（唐沢岳ー霞沢岳）

蝶ケ岳サポート隊総括

主計　勤也

今回の目的は、縦走隊の行動をサポートするため、蝶ケ岳と徳本峠にデポすることを第一の目的とする行動である。第二の目的は、メンバーの構成から見て、一年生が３人入っているところから、冬季におけるテント生活、雪上生活に重点を置くこととした。コースも稜線に出るまでは、梓川沿いの森林地帯であるため、天候に左右されないので、思いどおりの行動が出来るから、雪上でのボッカ、森林帯でのラッセルと計画を練った。また、稜線に出てからは、常念岳までのコースを、アイゼンテクニックとバランスの訓練を試みることにした。また、テント生活、設営、撤収等に慣れることを注意した。

出発を前にして、松本での装備の準備が悪く、最後に出発した。蝶隊は不足する装備と連絡不十

分で、リストにある品が全部揃わないままで出発することになった。沢渡からのボッカは、アイスバーンの上に雪が積もり、重荷のためバランスを失いがちで、不安定であったが、難なく山賊小屋付近にテントを張った。

森林帯のラッセルは、非常に苦労したが予定どおりの行動ができた。テント生活は良かったが、早朝の撤収は時間を食った。アイゼンテクニックは思うほどの練習は出来ず、後日の練習を待つ。

全体としては、第一の目的たるサポートは果たしたので、成功と言えるであろう。その他、第二の目的は、日が立つに良くなってきたし、特にラッセルでは、AC ～大滝間で十分練習し、また成果があがったと思われる。ただ、合宿前の伊那・松本の連絡が不十分であったのが、この合宿の小さな遺憾の点であるであろう。

合宿反省　　2月3日

装備について

1、テント

・テント（東沢 BC）が潰れた。BC は夏天であるから弱かった点もあるが、キーパーを置いたほうが良くないか。

・ナイロンテントは凍りつかないから重量、体積等が少なくなり機動性が高まる（通気性に問題あり）これについて研究の余地あり。

・現状から冬期にも夏天の使用を余儀なくされている。この欠陥を補うため、計画に余裕を持たせる必要がある。徳沢あたりの経験からみて、BC で夏天を使用したが判断が甘かった。夏天の使用の際はキーパーを置く必要がある。

2、ラジュース

・ラジュースの構造を一通り覚えて、一応の修理が出来るようになる必要がある。点検や分解掃除を普段からやっておく必要がある。マンドリンなど点検は不十分。

・不調のラジュースを点検するため、テストの時間をもっと長くして確かめる必要あり。

・入山前には必ず点検をすること。

3、ラジオ

・唐沢隊はラジオが無かった。事前に調達できなかったのか。

・ラジオの取り扱いが不注意。電池やラジオは防湿包装のこと。

4、その他

・ミトンなど身につけるものは、ちょっとしたことでも注意しなければならぬ。

・雪落としのタワシをもっと大きく丈夫なものにする必要あり。

・食器拭きに布きんとか紙を用意したら便利である。

・ワカンの紐、今回の結び方は非常に具合良かった。テープよりも丸紐にワセリンを十分に浸み込ませたものが好調。ワカン破損に備えて、長期合宿には、5 ～ 6 人で一足スペアが必要。

・ミトン、オーバーシューズなどは個人の場合に応じて注文のときはっきり表示すべきである。（例）

今回のオーバーシューズは皮が下に張ってあったので、丈夫というより巾が大きすぎて、アイゼンを履くのに苦労した。ミトンが一般に小さすぎる。

5、行　動

・トレーニングは絶対必要である。バランスが崩れるのは、バテがきてからが激しい。

・メンバー編成でもっと考える必要があった。唐沢サポート隊は人数が足りなかった。

・日数も足りなかった。（特に後半）餓鬼岳までの半ポーラーでは、サポート隊はサポートの任務を辛くも果たしただけだった。

・燕隊、蝶隊は鍋冠山から下山したが、大幅なコース変更は危険ではないか。そのときの状況で安全でよりよいと考えれば変更してもよいか。予定ルートが急変（ナダレ等）して止むを得ない場合以外は変更しないほうが良い。

・燕隊、蝶隊はサポート任務が終わり、リーダーの相談で変更したのだから、その理由をはっきり記録に残しておけばそれで良いと思う。

・森林帯のラッセルは考え方が甘かった。餓鬼～東沢、大滝～徳本、徳本～霞沢が各々一日のところを二日かかっている。
・偵察のとき、鉈目、標識等統一したほうが良い。
・鉈目は方向を示すより、次の鉈目が見えるところに付けるようにした方が良い。
・沈殿日の余裕を行動の半分以上にしたほうが良い（行動１に沈殿２）
・餓鬼でのポーラーにもっと時間と人数を使うべきであった。

6、食　糧

・パック形式は非常に便利である。今後はこの形式で行くべきである。
・手違いで塩分を忘れたり、ダシ粉の分量が不適当であった。
・ダシ粉が少なく、汁がすくなくなり、喰いにくかった。
・乾燥野菜は切り干し大根だけでよい。
・ラーメンのルーはどろどろ過ぎる。
・クッキーは美味くて量も十分である。（袋が弱かった）
・飲み物（特にジュース）は余裕を持ちたい。
・蛋白質がたりなかった。
・米の飯でなければ力がでないことは無い。

●縦走隊の２年部員　川崎・小谷・西郡・出島

●常念岳から蝶ケ岳の稜線で　最後尾はリーダー葛西

●常念岳頂上に集結した縦走隊と燕岳サポート隊の面々